Tokushima University Archaeological Heritage Management Office Newsletter
徳島大学埋蔵文化財調査室
ニュースレター
No.5
2017 Autumn

遺構の年代と機能を探る

発掘調査では、住居、墓、水田など多様な構造物が発見され、これらは遺構とよばれます。日本では近代になるまで建物や施設は木で造られることが一般的でした。これらが長期間地中に埋没すると、木質部分は腐敗してしまうため、発掘調査では建物の基礎部分や柱穴など、地面に掘られた窪みだけが検出されます。そのため、これらの遺構がいつ頃、どのような目的で造られたかを知るためには、多様な視点での検討が必要となります。

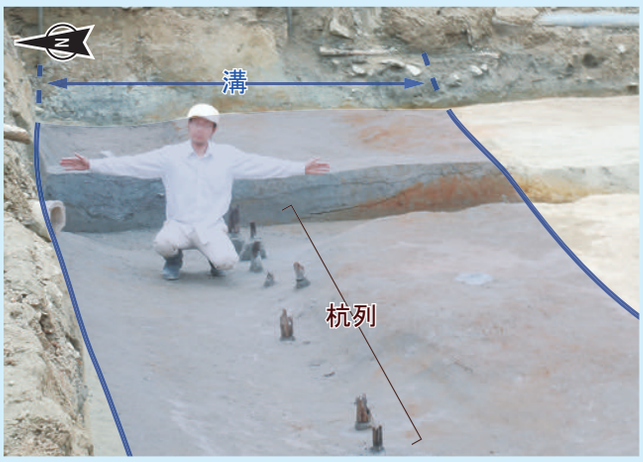
さて、本調査室では 2013 年度に常三島キャンパスの地域連携プラザ新営に伴って発掘調査を行ない（常三島遺跡第 19 次調査）、2016 年度に『常三島遺跡 3』と題した報告書を刊行し、その成果を公開しました。ここでは、本調査で発見された溝を素材に、これがいつ頃、なぜ造られたかを明らかにする方法について紹介します。

（三阪一徳）

発見された溝

本地点の発掘調査では、江戸時代の地層から、東西方向にのびる幅約 3 mの溝がみつかりました。また、溝の底付近には杭が列をなして打ち込まれていました。

この溝は、いつ頃、どのような目的で造られたのでしょうか？溝の地層、出土品の特徴や年代測定、江戸時代の絵図や文献など、多様な視点で考えてみましょう。



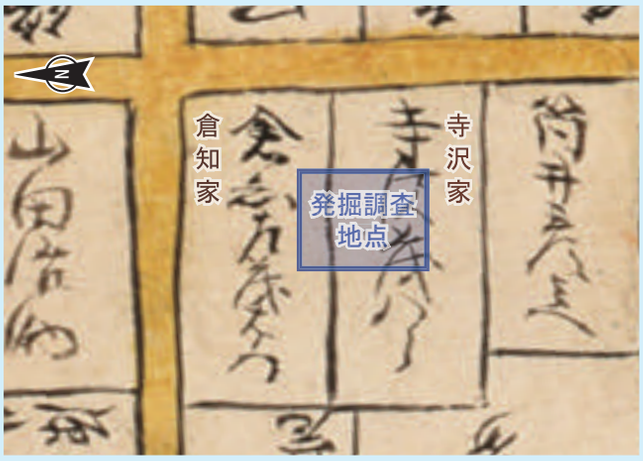
発掘調査でみつかった溝

絵図と文献から考える

この溝は一体なんのために造られたのでしょうか？そのヒントが江戸時代の絵図や文献史料に隠されています。

江戸時代の絵図と現在の地図を重ね合わせると、発掘調査地点は常三島に所在した 2 つの武家屋敷地にまたがり、溝はちょうど両屋敷の境に位置することがわかります。

さらに、徳島藩には家臣の家系に関する記録が残っています。これによると、たとえば享保 12 年頃は、倉知家と寺沢家の屋敷境として、この溝が機能していたと推定されます。

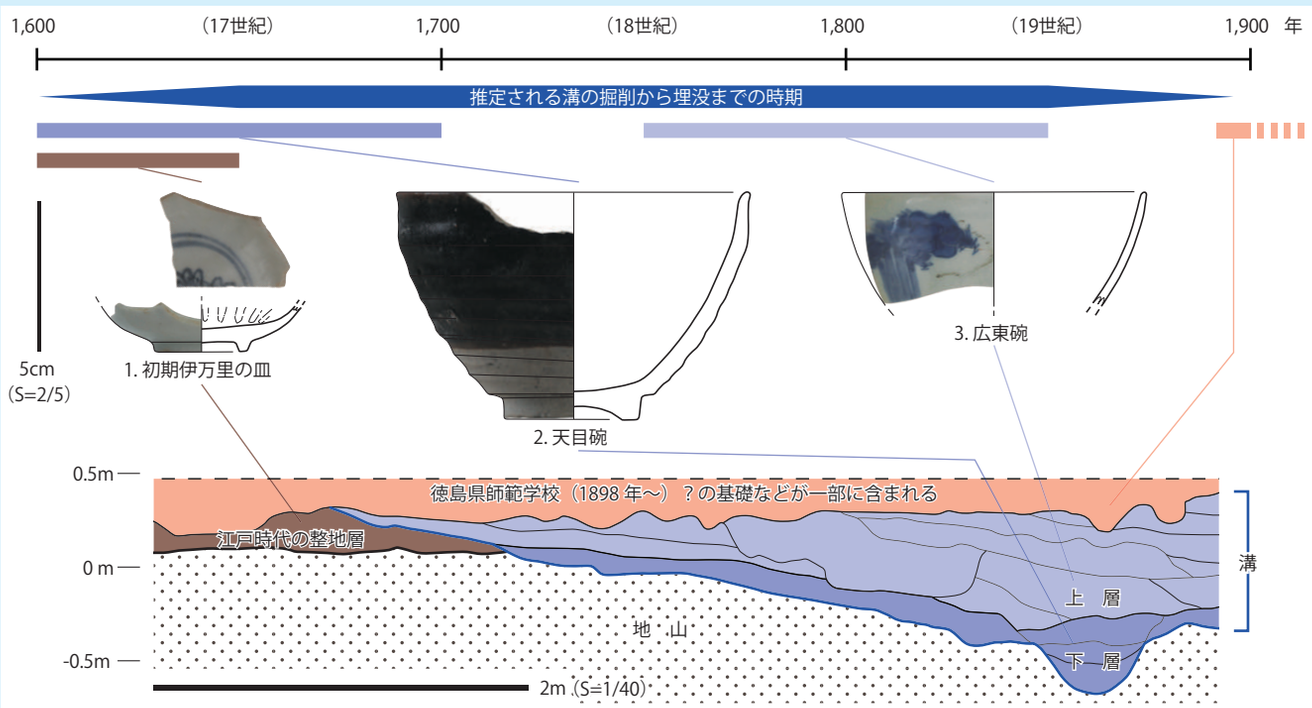


享保 12（1727）年頃の常三島と調査地点周辺
『御城下絵図』（徳島大学附属図書館所蔵、同館貴重資料高精細デジタルアーカイブより引用・改変）

地層と出土品から考える

下に示した地層と出土品から、溝が造られた年代を考えてみましょう。

まず、溝は江戸時代の整地層の上面から掘り込まれており、整地層には 17 世紀前半の初期伊万里の皿（1）が含まれています。つまり、溝はこれ以降に掘削されたと考えられます。さらに、1898 年以降に建設がはじまった徳島県師範学校と推定される建物の基礎などによって、溝の一部が破壊されています。そのため、このとき溝はすでに使われておらず、埋まっていたとみられます。また、溝に埋まった土の下層から 17 世紀代の天目碗（2）、上層から 18 世紀後半～ 19 世紀前半の広東碗（3）がみつかっています。ここから、17 世紀代には溝が使用されており、18 世紀後半以降は溝の下層に一定程度土が堆積していたといえます。



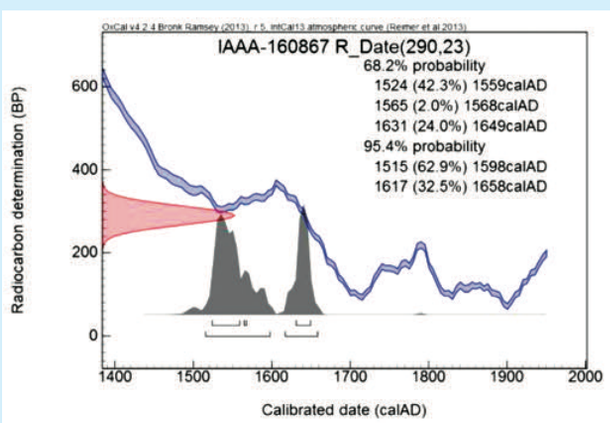
出土品の時期（上）と溝の土層断面図（下）

杭から溝の年代を考える

溝の底には、杭が列をなして打ち込まれていました。その機能はよくわかっていませんが、溝を造った時期や機能していた時期を推定する重要な試料となります。

ツガ（マツ科）で作られたこの杭には、最も外側の年輪が残っていたため、木が伐採された年代を推定することができました。放射性炭素年代測定の結果、16 ～ 17 世紀代に木が伐採された可能性が高いことがわかりました。

地層と出土品の検討からは、溝が 17 世紀前半以降に掘られたと推定されました。年代測定によっても、これと矛盾しない結果がえられたといえます。



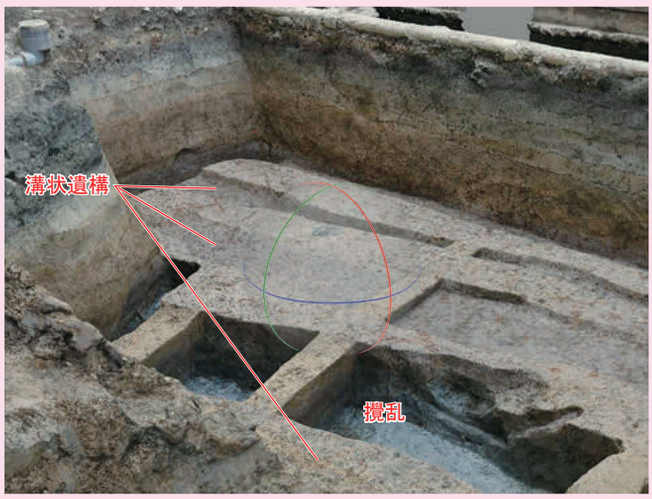
測定結果を示す暦年較正グラフ（左）と年代測定を実施した杭（右）

発掘調査速報

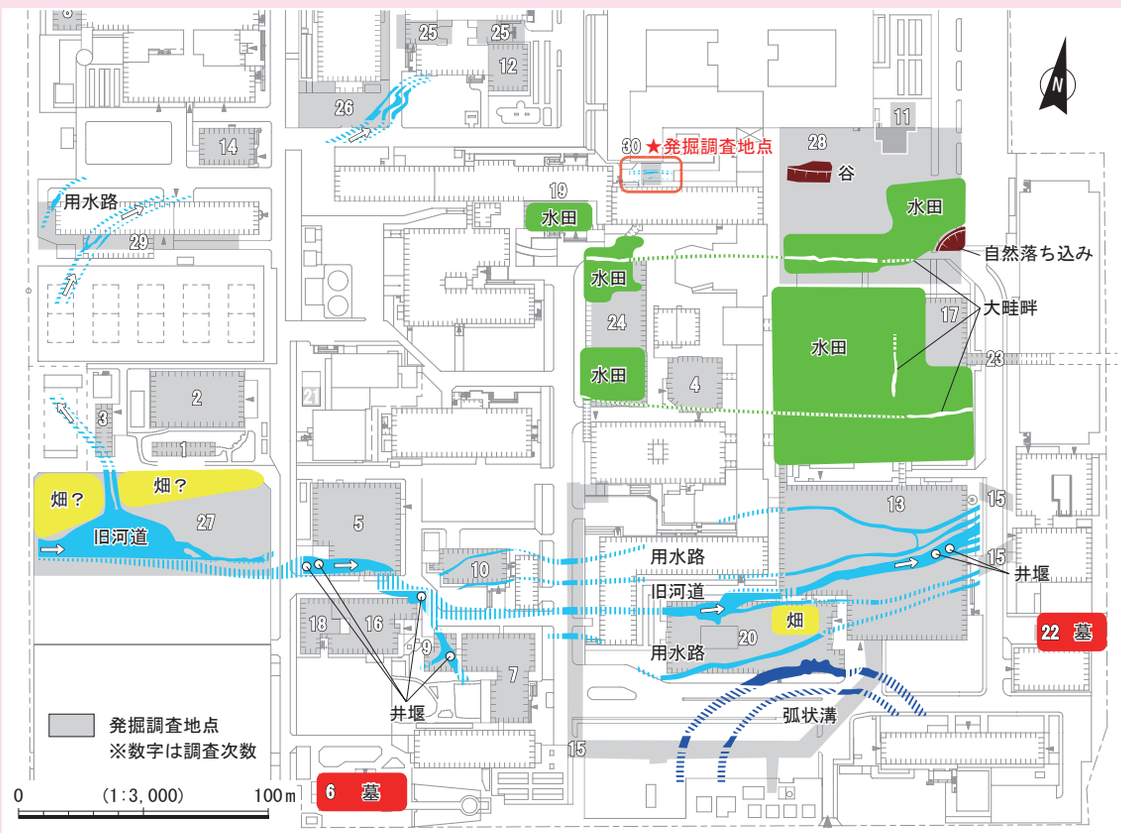
2016 年 11 月から 12 月にかけ、蔵本キャンパス内で渡り廊下建設に伴い発掘調査（庄・蔵本遺跡第 30 次調査）を実施しました。本学総合科学部の学生も参加し、掘削や測量作業を体験しました（1）。また、従来の 2 次元的な測量に加え、写真を用いた 3 次元測量を実施し、遺跡の立体的な記録を行ないました（2）。

調査の結果、現在の地表の約 1.5m 下から、2300 年以上前の弥生時代前期に造られた溝状遺構が 3 つ並んで検出されました。本地点周辺の調査では、水田とそこに水を供給する用水路や畑が発見されています（3）。溝状遺構の機能は特定できていませんが、周辺の状況から用水路または畠の畝や畝間である可能性が推定されます。

1．発掘調査の風景



2．写真から作成した 3 次元モデル



3．調査地点の位置と庄・蔵本遺跡の弥生時代前期前半の主な遺構

考古学講座を開催しました

2016年8月に「庄・蔵本学のススメ」、2017年3月に「常三島学のススメ」と題した徳島大学考古学講座を各3回、計6回にわたり開講しました。また、毎回10～20名の方に参加いただき盛況に終わりました。

講座では遺跡についての講演の後、出土品を閲覧し、キャンパス内の発掘調査地点を巡りました。受講者の皆さんには、弥生時代や江戸時代の人々のくらしに思いをはせ、大学構内遺跡の価値を一緒に考えてもらいました。

「常三島学のススメ」の講演風景

フィールドワーク「常三島遺跡を歩こう！」の風景

庄・蔵本遺跡出土品の閲覧風景

常三島遺跡の解説パネルを設置しました

2017年3月に工学部建設棟の北東隅に、常三島遺跡の解説パネルを設置しました。1992年以降、本調査室が実施した発掘調査により、常三島キャンパス一帯に広がる近世徳島城下町の武家屋敷地の実態が明らかになりつつあります。パネルでは遺跡の概要、調査地点の位置、主な出土遺物・遺構について解説しています。

常三島キャンパスへお越しの際は是非お立ち寄りください。配架しているリーフレットも持ち帰りいただけます。

常三島遺跡の解説パネル

編集後記

常三島遺跡の発掘調査で発見された溝を素材に、それがいつ頃、どのような目的で造られたのかについて探る方法について紹介しました。また、庄・蔵本遺跡の発掘調査速報、考古学講座、常三島遺跡の解説パネル設置について報告しました。今後も調査・研究成果をさまざまな形で紹介していきたいと思います。（三阪）

編集発行：徳島大学埋蔵文化財調査室　2017年9月30日発行

〒770－8503　徳島県徳島市蔵本町2－50－1　TEL・FAX　088－633－7236
ホームページ　http://tokudaimaibun.jp/